

郊外部新市民の 二つの型

中田町・青葉台の実態調査
から
小玉重光

1—— 調査の方法と目的

41年7月、調査室において、最近横浜の郊外へ転入してきた「新市民」を対象に実態調査を実施した。調査地点として戸塚区中田町の中田小学校周辺と港北区恩田町・つつじが丘の多摩田園都市線青葉台駅周辺の2地点を選定し、そこに住む住民を対象とした調査員による訪問、面接によるアンケート調査を行った。

最近10年間の横浜の人口増加の激しさは大都市中最高で年間7万～8万人もの人口がふえている。それだけでなくその背後には年間40万人にもものぼる歴大な人口流動が行なわれている。その基本的な要因は、東京からの人口の逆流のなかで、横浜が東京の市街地化の拡大のなかでそのなかにもみこまれてきたということであった。今回の調査では、とくに最近数年間の転入市

民層に重点をおき、郊外部に家を求め生活をはじめた新市民たちの転入経路、職業、収入などをとおして生活構造を明らかにし、地域、職場、交友などの関係をとおして具体的にどのような意識をもち、行動をしているかをみようとした。

そうしたことから、二つの調査地点はどちらも最近急激に人口がふえてきた地域であるが、そのうち中田町は個人住宅が順次建設され徐々に宅地化されてきた住宅地である。この地域には住宅公団、公社、公営住宅などの公的な大量住宅は建設されていない。この地点は戸塚上飯田線に沿って戸塚駅からバスで12分、3分の地点にある。ただしこれはバスがスムーズに通ってのことで、朝夕のラッシュ時には道路混雑のため30分以上もかかることがしばしばある。この付近の開発のテンポは戸塚駅を中心として広がっていき、本格的な急増をみせているのは最近5、6年のことである。中田町は367.5haの広さをもつ農村地域で、30年当時829世帯4,180人の人口があったのが、35年には1,268世帯5,686人、40年には3,810世帯14,341人へと大幅なふえ方をみせている。この地域は公団、公営住宅等の公的な大量住宅建設がされていないことが、一つの性格を与えている。

民間宅造業者の分譲地が地主の土地の切売りによって宅地化された地域で、現在でも小学校付近だけで毎日4、5軒の家がたてられている。

調査は中田小付近の2地点をとり悉皆調査とした。対象世帯は320世帯で、そのうちにはとくに地つきの20世帯ほどをふくめた。最終有効調査数は311世帯となっている。

他方、港北区の青葉台駅周辺は東急の開発する多摩田園都市第3ブロックに属し、38年秋ごろから分譲がはじめられた地域である。41年4月の電鉄田園都市線の開通によって、急速に焦点のあてられてきた地区である。それまで農地と村の丘陵だったこの地域は、区画整理方式により住宅造成がすすめられてきたが、その一部のつつじが丘の百数世帯は38年秋ごろから入居しており、いま青葉台駅を中心として相当数の家が建設されつつある。

調査はつつじが丘をふくむ周辺一帯の一戸建住宅に住む世帯を対象とした悉皆調査である。一戸建住宅数は調査時点で240戸ほどであったが、家はできても入居していないもの、留守家のため調査不能のものもあって有効調査数は179世帯にとどまった。なお、当時すでに県住宅公社アパートが何棟もあったが調

査からは除外した。調査は世帯を対象とし、その代表者に面接しアンケートとに答えてもらう方法をとった。面接対象者は世帯主と妻を同じ割合で聞くことにし、対象世帯を二分し、半数は世帯主から残り半数は妻から回答をえている。質問事項の大部分は世帯の事実を聞くものだが、一部は意識調査を含んでいる。以下のものは、その調査結果の一部である。30年以降、横浜の郊外をうめつくしている人々は、横浜とどんな関係をもってきたのだろうか。ふえていく新しい市民たちは日に日に、横浜市民の中の大多数を占めていきつつある。この調査は意識は高いがマイホームに徹しているといわれる新しい市民の分析の一部としての役割をはたすものと思われる。

2——新市民・その数と動き

中田町と青葉台の二つの地区

は、双方とも、市民のうちでも家をもつことができた生活内容で中位から上位に属する市民がほとんどである。しかし、この二地区は宅地化のプロセス、転入市民の構成の上で、郊外部宅地化の主要な二つを代表している。中田町では東京への通勤体系にのった郊外部で虫喰い状に宅地化が行なわれ、郊外部に典型的な下水、水道、道路が整備されないまま家が順次建てられてきた。だから東京への通勤圏にはあるが、現状では時間的には相当負担で、横浜駅周辺等市内に職場をもつ人々もあとでみるように相当多い。

他方、青葉台では初めから東京郊外部、東京へ直結する住宅地として建設された、大規模で環境整備も行きとどいた高級住宅地として、39年ごろから分譲がはじめられた場所である。

このような二地区の性格は、調査集計にはっきりみられるとおり、中田町では最近数年の間に

家と土地を確保することのできた一般的な郊外部住宅地を代表し、居住者の層も広い範囲にわたっている。青葉台では高級住宅地として土地購入者はより限定されており、客層は当初市内、県内からもあったが、順次東京からの人々に限定されるようになっていく。

家族構成では、世帯員3～4人が最も多く、中田町では57.4%、青葉台では64%と半数以上を占めている。これは夫婦と子ども1人ないし2人という家族構成が多いことで、乳幼児期、低学年の学童期の子どもたちが多くなっており、転入時1人ぐらいの子供だったのが、その後2人ないし3人とふえていくものとみられる。そのため数年のタイムラグを順次へて幼稚園・保育所・小学校・中学校、やがて高等学校へと行政需要を高めることになる。ちなみに40年の国勢調査で年令段階別人口をみれば、市内では保土ヶ谷、戸

表1——世帯人員別分類<家族>

区分	中田町	青葉台
1人家族	11 < 3.5 >	3 < 1.7 >
2人 "	51 < 16.4 >	27 < 15.2 >
3人 "	89 < 28.7 >	46 < 25.8 >
4人 "	89 < 28.7 >	68 < 38.2 >
5人 "	31 < 10.0 >	24 < 13.5 >
6人 "	25 < 8.1 >	7 < 3.9 >
7人 "	6 < 2.0 >	2 < 1.1 >
8人以上の家族	8 < 2.6 >	1 < 0.6 >
計	310 < 100.0 >	178 < 100.0 >

表2——世帯主の年令別分類

区分	中田町	青葉台
20才代	68 < 21.9 >	14 < 7.8 >
30～34才	64 < 20.6 >	53 < 29.6 >
35～36才	62 < 19.9 >	36 < 20.1 >
40～44才	34 < 10.9 >	31 < 17.4 >
45～49才	16 < 5.2 >	16 < 8.9 >
50～55才	29 < 9.3 >	16 < 8.9 >
56～60才	19 < 6.1 >	7 < 3.9 >
61才以上	19 < 6.1 >	6 < 3.4 >
計	311 < 100.0 >	179 < 100.0 >

表3——家族のなかでだれが働いているか

区分	中田町	青葉台
世帯主のみ	193 < 62.0 >	139 < 78.5 >
夫婦共稼ぎ	62 < 19.9 >	13 < 7.4 >
世帯主と子供	17 < 5.5 >	12 < 6.8 >
その他	31 < 10.0 >	11 < 6.2 >
働いていない	8 < 2.6 >	2 < 1.1 >
計	311 < 100.0 >	177 < 100.0 >

塚、港北区、市外では茅ヶ崎市、相模原市のごとく人口の急増地域では、0～4才人口が全人口の10%以上も占めている。義務教育卒業までの子どもの年齢段階別構成を比較していくと、その他の地域における、いま急増段階に入ったところ、増加が一息しやや鈍化した地域などの特徴をよみとることができる。

世帯主の年齢構成では、両地区とも30才から44才ぐらいまでに集中しているが、中田町では20才、45才以上50代、60代へも広がりをみせているのに対し、青葉台では30～44才の間に一層集中している状況がみられる。青葉台のごとき高級地において、世帯主の年齢30～44才ぐらいの間に集中していることは、家庭の階層とともに生活構造全体が中田町と比較して、類似性をより多くもっているといえる。こうした地域的な類似性のかたまりは、半面、外の異質なものからは独立しようとする排他性をもつことにもなりかねない。

つぎに世帯のなかで収入を得ているものはだれかをみると、中田町では世帯主のみが働いているものは62%、夫婦共稼ぎは19.9%となっているが、青葉台では世帯主のみ働く世帯は78.5%と多くを占め、夫婦共稼ぎは7.4%ときわだって低くなっている。この二つの地域の傾向では、世帯主の収入が一定水準を越えるに従って妻は家庭へ戻り共稼ぎ世帯は減少している。中田町では共稼ぎをして一定水準の生活を保ち、土地、家庭の建設資金を返済している世帯が相当あるとみられる。家庭の主婦が内職またはパートタイムで働いている世帯の数をみると、中田町では23.6%、青葉台では9.3%という割合となっており、ここでも同じような状況がみられる。もっとも、戸塚駅周辺に電機、機械関係の多く

表4——主婦の方が内職またはパートタイムで働いておられますか

区分	中田町	青葉台
働いている	65 < 23.6 >	16 < 9.3 >
働いていない	211 < 76.4 >	156 < 90.7 >
計	276 < 100.0 >	172 < 100.0 >

の大中小工場をもつ中田町にくらべて、田園都市線周辺にまわたくの住宅地として生まれた青葉台では、働いたり内職の機会がきわめて少ないことは考慮に入れておかねばならない。

さきに二地域と調査対象の一般的な性格をみたが、二地域の世帯の現在地における居住期間はほとんどが5年以内のもので占められ、中田町で84.1%、青葉台で99.4%もの世帯が最近5年間に移ってきている。青葉台では住宅地開発の経過から現在地居住期間6年以上のものは皆無に近いが、中田町では昭和30年までに転入したものはあるが非常に少なく、35年までのものは若干みられ、35年以後急増し最

表5——お宅ではここに何年ぐらい住んでおられますか

区分	中田町	青葉台
1年以内	88 < 28.4 >	82 < 46.9 >
3年以内	126 < 40.8 >	80 < 45.6 >
5年以内	46 < 14.9 >	12 < 6.9 >
10年以内	23 < 7.5 >	1 < 0.6 >
15年以内	2 < 0.6 >	0
15年以上	24 < 7.8 >	0
計	309 < 100.0 >	175 < 100.0 >

近まで年を追うごとに社会増が激しくなってきたという、横浜の郊外部宅地化の代表的な性格を表わしている。

つぎにこれらの新市民の転入経路をみると、前住地が区内または市内であったものは、中田町では34.4%、青葉台では19.6%、川崎・横須賀などの県内のものが中田町で25.4%、青葉台で19.0%となっている。東京都からのものは中田町で33.1%、青葉台で53.6%と非常に高い割合を占めており、横浜郊外部宅地化の主要な供給源が東京都であることを示している。さらに前住地での居住期間をみると、両地域とも10年以内のものが大部分を占め、5年以内のものだけでも中田町で48.7%、青葉台で55.9%となっている。前住地

の前の住所、前々住地は県内、都内ばかりでなく、広く東北、北陸、関西などに散らばっているのは当然だが、それでも青葉台では前々住地が東京であるものが50%を占めている。

一般的にはつぎのようなことがいえよう。横浜の郊外へはいつてくる人たちのほとんどは地方から直接横浜の郊外部へ入りこむのではなく、東京または京浜地帯の通勤至便な場所におちつき、数年ないし10年ほどの期間をへて入りこんでくる人たちが多い。中田町での特徴は、前住地において借家、民間アパート、官舎、社宅などに住んでいた人が結婚、子どもの成長、なかには停年を契機として家を求めて移ってきた。そのためには多少の環境の不備は覚悟してき

ている。青葉台では混雑した東京都心をさけ同じ土地を求めるなら少々値段は高くても、通勤に便利で安心できる所をとの選択が強く働いている。空気の悪い都心にある家を売払って代替地をと求めてきた人々が相当数みられている。

住居形態からみると持家<ほとんどが土地をもっている>の人たちが多く、この調査では中田町では70%、青葉台では94.4%までが自分の家に住んでいることになる。中田町では借家、間借、アパートがあわせて21.7%あるほか、官舎、社宅に住むものが8%あった。農家では家賃収入を目当てにアパート建設がふえているが、この割合は中田町全体の傾向をほぼ表わしているとみられる。

表6——世帯主の前住地はどこか

区分	中田町	青葉台
区内	58 < 18.6 >	12 < 6.7 >
市内	49 < 15.6 >	23 < 12.9 >
県内	79 < 25.4 >	34 < 19.0 >
東京都	103 < 33.1 >	96 < 53.6 >
その他	22 < 7.1 >	14 < 7.8 >
計	311 < 100.0 >	179 < 100.0 >

たが、住んで数年してみると不便なことが多いと不満をもちはじめ

転入前地からみれば、前住地では借家、アパート、官舎、社宅などに住む人たちがほとんどではあるはずである。調査結果に

表8——さらにその前に、世帯主の方が住んでいた所があればおしえて下さい。

区分	中田町	青葉台
市内	29 < 12.6 >	8 < 5.1 >
県内	45 < 19.6 >	21 < 13.5 >
東京都	76 < 33.0 >	79 < 50.6 >
関東	18 < 7.8 >	8 < 5.1 >
東北、北陸	23 < 10.0 >	6 < 3.9 >
東海	9 < 3.9 >	3 < 1.9 >
関西方面	11 < 4.8 >	23 < 14.8 >
その他	19 < 9.3 >	8 < 5.1 >
計	230 < 100.0 >	156 < 100.0 >

表7——前住地での居住期間

区分	中田町	青葉台
1年以内	35 < 12.4 >	19 < 10.7 >
3年以内	63 < 22.2 >	50 < 28.2 >
5年以内	40 < 14.1 >	30 < 17.0 >
10年以内	46 < 16.3 >	27 < 15.3 >
15年以内	19 < 6.7 >	15 < 8.5 >
15年以上	80 < 28.3 >	36 < 20.3 >
計	283 < 100.0 >	177 < 100.0 >

表9—お住いの形態についてお知らせ下さい。

区分	中田町	青葉台
自家	218 < 70.0 >	168 < 94.4 >
借家	28 < 9.1 >	8 < 4.5 >
間借	3 < 1.0 >	0
アパート	36 < 11.6 >	0
官舎、社宅	25 < 8.0 >	0
その他	1 < 0.3 >	2 < 1.1 >
計	311 < 100.0 >	178 < 100.0 >

はあきらかにそうした状況が出ている。ところが、青葉台の場合には前住地における住居形態が持家のものが28.5%と3割近くあることは、空気の良い通勤条件もそう悪くない土地をと選んで、前の家を処分して移ってきたことを示す。もっともなかには結婚等のため家を出たものも若干あるが、中田町の場合と著しい対照をなしている。

3—職業、通勤、収入

二地域における世帯主の職業はいずれも被用者の多いことが特徴的である。集計では便宜上教職を被用者とは別にのせてあるが、教職までふくめれば被用者は中田町で73.3%、青葉台では86.6%と圧倒的である。ただし中田町においては商店街をさけた住宅地を調査地点にとっており、青葉台では住宅地となってまもなく商店街すらない状況であることを考慮しなければならないが、いずれにせよ横浜市の

表10—前住地での住居の形態

区分	中田町	青葉台
自家		47 < 28.5 >
借家		21 < 12.7 >
間借		12 < 7.3 >
民間アパート		34 < 20.6 >
官舎、社宅		31 < 18.8 >
公団公社アパート		17 < 10.3 >
その他		3 < 1.8 >
計		165 < 100.0 >

郊外部は被用者によってうめられてきている。被用者のなかでも事務職セールスが最も多く、つぎが技術職、研究職、労務職<工員等>の順となっている。二つの地域のちがいは同じ被用者でも管理職の数の違いとなって現われ、世帯主が勤務先で課長以上の管理職にあるものの数は、中田町で全世帯数の28.1%だが、青葉台では43.6%と半ば

近くを占めていることは注目すべきことである。これは同じ被用者とはいっても、中小企業の法人化にともない本来経営者＝自営に入るべきものまでが被用者に分類されてしまうことも一因であろう。たとえば青葉台では東京・川崎方面に、親兄弟の会社に働いているとするものがいくつかみられている。もう一つは、青葉台では、技術

表11—世帯主の職業

区分	中田町	青葉台
自営 <農業・漁業>	17 < 5.5 >	1 < 0.6 >
〃 <商工・サービス業>	28 < 9.0 >	8 < 4.5 >
〃 <その他>	12 < 3.9 >	4 < 2.2 >
被用 事務職セールスマン	106 < 34.0 >	82 < 45.8 >
〃 商店店員	0	0
〃 労務職	41 < 13.2 >	5 < 2.8 >
〃 技術職	77 < 24.8 >	61 < 34.1 >
教職	4 < 1.3 >	7 < 3.9 >
その他	10 < 3.2 >	4 < 2.2 >
無職 <主婦をふくむ>	16 < 5.1 >	7 < 3.9 >
計	311 < 100.0 >	179 < 100.0 >

表12—世帯主の方はお勤め先でどんな地位におられますか

区分	中田町	青葉台
管理職 <課上以上>	72 < 28.1 >	72 < 43.6 >
その他	184 < 71.9 >	93 < 56.4 >
計	256 < 100.0 >	165 < 100.0 >

職・研究職の割合が中田町と比較して高く、中田町の24.8%に対し34.1%となっている。それとともに、労務職では中田町が13.2%を占めるが、青葉台では2.8%と非常に少くなっている。青葉台においてはホワイトカラー、技術職でも階層が高い。勤務場所では東京都内で働くものの数は多く、中田町では38.6%、青葉台では60.6%となっている。青葉台の場合では川崎へ行くものの17.3%を加えれば、働くものの80%近くが東京方面への通勤者ということになる。中田町の場合でも横浜駅を通過して川崎・東京方面へ通勤するものは50%に達している。他方、横浜市内で働くものは中田町では42.2%を占めるが、青葉台ではわずか17.4%にすぎない。区内で働くものは、同じ区内とはいっても戸塚駅周辺に内陸工業地をもつ中田町では21.6

%と相当に高い。市内で働く人は青葉台では極端に低いが、市内でも管理機能が集中している中、西、南区では青葉台は87%と中田町より高い比重を示し、鶴見、神奈川区の工場地帯へ通う人は中田町が16.9%と青葉台を大きく上回っている。つぎに通勤時間では両地域ともほとんどの人が1時間半までに職場に到着しており、それ以上時間のかかるものは急に減少している。そのうちでも1時間～1時間半かかるとするものが両地でもっとも多く、現在郊外へ移りすんでいく人のほとんどが通勤時間の限界を1時間半程度にしているとみることができよう。中田町と青葉台の住宅地としての地域的な性格は、住人たちの収入階層で見るとはっきりする。世帯当りの手取り月収は、中田町では3万円以上5万円未満のものが40%とこれを頂点と

して青葉台では5万円以上7万円未満の階層が31.5%、7万円以上10万円未満が32.0%とこの二つを山に曲線を描いている。中田町では3万円未満のものが14%ぐらいであるが、青葉台ではこの階層はなくなっている。逆に月収10万円以上の階層は両地域とも同じように存在している。中田町では平均的な郊外住宅地として住民の階層でも多様性をみせているが、青葉台では低階層がみられない。収入上の差異はさきにも世帯主の従業上の地位とともに、学歴の差異としても表われている。中田町の場合では世帯主の学歴が小・中学卒、高校卒、大学卒の割合が大体平均しているが、青葉台では大学卒が74.3%と大部分を占めている。妻の労働、共稼ぎについては両地区とも世帯主の収入が一定水準をこすにつれて妻は家庭に戻る現象が強くなっている。しかし、現在共稼ぎをしている家庭では7

万～10万円と相当高水準の月収しているのに対して山を描いているのに対して

表13—世帯主の勤務場所

区分	中田町	青葉台
区内	60 < 21.6 >	11 < 6.4 >
中、西、南区	21 < 7.6 >	15 < 8.7 >
鶴見、神奈川区	19 < 6.9 >	3 < 1.7 >
その他市内	17 < 6.1 >	1 < 0.6 >
川崎	32 < 11.5 >	30 < 17.3 >
大船、藤沢	7 < 2.5 >	0
神奈川県内	11 < 4.0 >	4 < 2.3 >
東京都23区	107 < 38.6 >	105 < 60.6 >
〃 その他	0	0
その他	3 < 1.2 >	4 < 2.4 >
計	277 < 100.0 >	173 < 100.0 >

表14—世帯主の方は通勤にどのくらいの時間がかかりますか

区分	中田町	青葉台
30分以内	46 < 14.9 >	18 < 10.1 >
1時間以内	75 < 24.3 >	62 < 34.8 >
1時間以内	107 < 34.6 >	75 < 42.1 >
2時間以内	25 < 8.1 >	14 < 7.9 >
2時間半以上	4 < 1.3 >	0
通勤しない等	52 < 16.8 >	9 < 5.1 >
計	309 < 100.0 >	178 < 100.0 >

を得ているものが多く、収入階層区分と共稼ぎの関係からみると、収入の高いものが共稼ぎをしていないとは一概にはいえない。3万円以下の世帯とさらに10万円以上の収入の両端に位置する世帯では共稼ぎは少なくなっている。さらに世帯主の年齢と共稼ぎということを見れば、20才代に共稼ぎ世帯の多いことは当然として、30才代に入るとぐっと減り、40才代になると若干ふえる傾向をみせている。これは世帯主が30才代では小さな子どもをかかえているためとみられる。

こうした人々の余暇の過ごし方はどうか。世帯主の余暇の過ごし方としては、両地域とも庭いじりやテレビをみたりとする答が半ば近くを占めていた。その他日曜、休日には自分の仕事をしたり、ドライブやゴルフに行くなどとしたものもあったが相対的に近く、世帯主は余暇を主として家庭ですごしている。郊外生活者の平均的なすがたであろう。このほか生活内容の尺度としてカラーテレビなど家具の所有状況を調査してみたが、青葉台の場合には中田町と比較して乗用車とピアノの保有率が高

4——地域における生活と対応

地域における隣近所どうしのつきあいについての考え方をみると、両地域とも大体同じ傾向がみられる。隣近所とははっきりつきあいたくないとするものは、中田町で7.2%、青葉台で4.6%と少ないが、進んで交際すると答えたものはいずれも3割弱で、残りの大多数はまあ挨拶程度はするが進んで交際は求めないという人たちである。両地域を比較すれば、青葉台の方が隣近所のつきあいに対してより消極的であった。しかし問題をかえて、お祭りとか年末助けあい慶弔などの、地元の行事に参加するかどうかを尋ねると、両地域とも6割前後の人々が参加すると答えている。さらに自治会町内会を必要と思うかどうかという問いに対しては、中田町で90.0%、青葉台では85.5%の人たちが必要だと答えている。

表15—ご家族全員の大体の手取り収入はどのくらいありますか。

区分	中田町	青葉台
2万円未満	5 < 1.9 >	0
3万円 "	35 < 12.6 >	1 < 0.6 >
5万円 "	111 < 40.0 >	27 < 16.0 >
7万円 "	57 < 20.6 >	50 < 31.5 >
10万円 "	40 < 14.5 >	51 < 32.0 >
20万円 "	19 < 6.9 >	25 < 15.8 >
20万円以上	10 < 3.0 >	5 < 3.1 >
計	277 < 100.0 >	159 < 100.0 >

表16—世帯主の方はひまなときは、主になにをして過しますか

区分	中田町	青葉台
自分の仕事	26 < 8.6 >	15 < 8.7 >
ドライブ	7 < 2.3 >	7 < 4.1 >
ゴルフ	11 < 3.7 >	12 < 6.9 >
ハイキング	4 < 1.3 >	0
庭いじり	78 < 25.8 >	59 < 34.3 >
テレビ	63 < 20.9 >	24 < 14.0 >
読書	16 < 5.3 >	12 < 7.0 >
その他	97 < 32.1 >	43 < 25.0 >
計	302 < 100.0 >	172 < 100.0 >

かった。これは収入階層のちがいともいえるが、このほか地域の交通条件の相異をもあわせて考えていく必要があるだろう。

表17—お宅ではつぎのものうち何をもちですか。

区分	中田町	青葉台
乗用車	48 < 13.5 >	57 < 19.9 >
ルームクーラー	5 < 1.4 >	14 < 4.9 >
カラーテレビ	7 < 2.0 >	6 < 2.1 >
ピアノ	15 < 4.2 >	36 < 12.5 >
冷蔵庫	262 < 73.6 >	174 < 60.6 >
ステレオ	5 < 1.4 >	0
電話	4 < 1.1 >	0
DK.NA	10 < 2.8 >	0
計	356 < 100.0 >	287 < 100.0 >

表18—お宅では隣近所のつき合いを進んで
なさいますか

区分	中田町	青葉台
進んでする	76 < 24.8 >	50 < 28.6 >
普通	166 < 54.0 >	79 < 45.1 >
進んではしない したくない	43 < 14.0 >	38 < 21.7 >
	22 < 7.2 >	8 < 4.6 >
計	307 <100.0 >	175 <100.0 >

この理由は両地域とも新しい住宅地として生活環境の整備が十分でない状況から、地域清掃や衛生改善など生活環境の共同処理、防犯防火、市政や区政の伝達のため、さらに市や区に対する要求のとりまとめ機関として、自治会町内会の存在を評価している。郊外に新しく生活をはじめ、身のまわりの環境整備に対する関心が非常に高まっている様子を見ることができると、そこで具体的にどのような要求や不満をもっているかをみると、市役所、区役所に対するものとしては、まず第一に両地域とも道路整備、ゴミ・し尿処理の問題に集中している。つぎに、中田町では下水道、保育所・幼稚園、公園や子どもの遊び場整備や学校校舎の施設の充実、街灯の設備など要求が広範囲にわたっている。それに対し青葉台では道路、ゴミ・し尿問題のほか、区役所、保健所などの地域行政機関が近くなって不便なことがあげられている。丘陵地

帯を切り開き造成された青葉台での特徴がみられている。中田町と青葉台の生活環境に対する不満の相違は、第1には住宅地としての成長過程のちがいである。中田町では農村地帯から住宅地として相当人口が集中してきているため、下水道、子どもの遊び場などの問題がでてくる。青葉台では以上のほかに、子どもの教育のために学校施設の問題がでている。第2に、青葉台では幹線道路、下水道などの整備は住宅地造成にもなっている行なわれており、さらには田園都市の将来図が住民の頭に描かれているため、公共施設等の整備は時間の問題であるとして、より身近な日常的な

表19—自治会や町内会を必要だと思うか

区分	中田町	青葉台
必要だと思う	279 < 89.7 >	153 < 86.0 >
必要だと思わない	24 < 7.7 >	20 < 11.2 >
DK,NA	8 < 2.6 >	5 < 2.8 >
計	311 <100.0 >	178 <100.0 >

ものに不満が集中している。第3には、青葉台の環境水準は住宅区画の広さ、道路、公園、排水施設などの面で、中田町と比べてはるかに高いが、行政に対する不満の内容もそれに応じて高くなっている。市政以外のものに対する不満としては、両地域とも電話がひけないということと、警察の派出所がなく防犯が不安だとする意見が多かった。そのほか青葉台では商店街が近くなる買物が不便なこと、医院が少ないことがあげられ、住宅地はでき上がったがそれに伴う生活関連施設が欠如している状況をよく反映していた。中田町の場合には朝夕のラッシュ時に中田町～戸塚駅

表20—さきにあげたことのほかに、どんな不満や不便をお持ちですか

区分	中田町	青葉台
買物が不便	14 < 4.4 >	37 < 16.5 >
医院が少ない	10 < 3.2 >	50 < 22.3 >
交通が不便	102 < 32.4 >	21 < 9.4 >
交通事故が多い	4 < 1.3 >	1 < 0.4 >
警察の派出所がない	75 < 23.8 >	59 < 26.4 >
電話がひけない	105 < 33.3 >	54 < 24.1 >
その他	5 < 1.6 >	2 < 0.9 >
計	315 <100.0 >	224 <100.0 >

の道路混雑で、交通が不便になることが強調されている。両地域に共通することは、以上のような不満をなんらかの手段で自治会・町内会を通じて市政に要求するとする意向をつよくみせていたことである。さらにこうした新しい住宅地では個々の家の中にとじこもり、対外的なつきあいはできるだけ避けるという傾向をとる。特殊な場合をのぞいては行動が受動的であることが多いことは考慮しなければならぬ。

そうしたことから、地域的な関心でも居住地域をはなれた市政の問題になると関心の度合はきわめて少なくなり、市会議員の名前でも知っているものは中田町で20.6%、青葉台ではわずか9.5%となっている。しかし、政党支持では両地区とも全体として支持政党がはっきりしており、支持政党なしと答えたものは全国的な調査にくらべて少なかった。横浜のような人口流動

の激しい大都市では国の段階ばかりでなく、地方政治の段階まで候補者の政党所属を要求する声がつよくなっている。

5 買物と横浜への愛着度

買物行動をみると、魚、野菜などの食料品、雑貨など毎日消費する買物は、両地域とも近所の商店、スーパーマーケットを利用している。中田町では表通り<戸塚上飯田線>に日用品を扱う商店街があるほか、住宅地内には食料品店などがある。多くの人たちはこの近所の商店を利用しているが、若干の人は戸塚駅周辺の商店街まで出かけている。青葉台ではまだ商店街はなく、一、二のスーパーマーケットがあるだけで買物には非常に不便である。

日用品の買物でも下着などの衣類、雑貨など少し値のはるものになると、中田町の人たちは戸

には大船、藤沢方面へでかけるとしたものがあった。青葉台では町田商店街など少しはなれた商店街にでかける人が27.2%、新宿池袋、日本橋など東京方面へ出かける人が50.2%を占め、中田町の人たちにとって戸塚駅周辺という感じが青葉台の人々には東京都心を意味していることになる。

ボーナス時など年一・二度するまとまった買物では、中田町では38.8%の人たちが横浜駅西口・伊勢佐木町方面へでかけ、つぎに24.6%の人たちが戸塚駅周辺へでかけるとしている。青葉台では半ば以上の62.2%の人が東京方面へでかけ、2番目が横浜駅西口・伊勢佐木町方面の18.6%、その他<川崎など>が12.8%とつづいている。2位以下が大きくなっているのは特徴的である。青葉台では商店街が整備されていないことは買物行動のうえの重要な理由であるが、そこに住む人たちは仕事のうえでも趣味のうえでも、日常生活でも東京と直接結びついていることがわかる。中田町では居住期間が短いほど東京へ結びつき、反対に長くなるほど横浜の商店街との結びつきがでてくる。また、収入が高くなるほど東京へ買物に出かける機会の多くなることを示している。他方、青葉台では居住期間や収入

表21—あなたはいまどの政党を支持していますか

区分	中田町	青葉台
自民党	81 < 26.1 >	64 < 35.9 >
民社党	6 < 1.9 >	6 < 3.4 >
社会党	101 < 32.6 >	53 < 29.8 >
共産党	2 < 0.6 >	0
公明党	10 < 3.2 >	3 < 1.7 >
その他	3 < 1.0 >	0
支持政党なし	72 < 23.2 >	46 < 25.8 >
わからない	35 < 11.4 >	6 < 3.4 >
計	310 < 100.0 >	178 < 100.0 >

塚駅周辺、横浜駅西口、伊勢佐木町方面へ出かけている。近所の商店で購入すると答えたものは4.6%はすぎない。なか

に關係なく東京へ出かけていくものが多いことを示している。つぎに質問の趣旨をかえて、家庭の主婦が横浜駅西口や伊勢佐木町、港方面など横浜の中心市街地にどの程度でかけているかを調査してみた。横浜駅西口へ全然でかけない人は中田町で15.6%、青葉台では33.3%ある。さらに伊勢佐木町・港方面へでかけない人となると中田町で27.2%、青葉台では48.2%となっている。でかけない理由としては交通機関が不便なこと、行く用事がないことがあげられているが、それでも中田町の人々にとっては横浜駅を中心として横浜都心は東京の手前にある最大の中心街としての意味をもつが、青葉台の人たちにとっては長津田を經由し、横浜線で横浜へ出てくるのは非常に困難なことになる。

最後に、両地域の新市民の横浜への愛着度や買物先をみることによって、横浜への定着性と東京への依存度を検討してみよう。横浜市民として現在横浜に愛着を感じている人々は、中田町で51.0%、青葉台で36.4%を示し、青葉台では低くなっている。つぎに、いま愛着をもっていないが将来もてそうだとするものは、青葉台では37.0%、中田町では20.3%で青葉台が高くなっており、最終的に横浜に愛

表22—雑貨、衣類などの少し値のはる日用品はどこで買いますか

区分	中田町	青葉台
近所の商店	14 < 4.6 >	4 < 2.4 >
少しはなれた商店街	158 < 52.3 >	46 < 27.2 >
西口、伊勢佐木町	91 < 30.1 >	26 < 15.4 >
東京	18 < 6.07 >	85 < 50.2 >
その他	21 < 7.0 >	8 < 4.8 >
計	302 < 100.0 >	169 < 100.0 >

表23—まとまった値のはる買物はどこでなさいますか

区分	中田町	青葉台
近所の商店	18 < 6.5 >	1 < 0.6 >
少しはなれた商店街	68 < 24.6 >	9 < 5.8 >
西口、伊勢佐木町	107 < 38.8 >	29 < 18.6 >
東京	37 < 13.4 >	97 < 62.2 >
その他	46 < 16.7 >	20 < 12.8 >
計	276 < 100.0 >	156 < 100.0 >

着をもてないとするものは両地域とも大体同じの1割弱にへっている。住居を横浜に定めた以上横浜が好きになりたいという考え方がでている。

この内容にたちいってみるため、横浜への愛着度を「音楽会、演劇、展覧会等をどこにみに行くか」の回答と関連させてみれば、横浜で音楽会や展覧会をみると答えた人々の横浜への愛着度は高く、東京へ行くと答えた人の愛着度の低さと対照的になっている。同じく現在地での居住期間の長さに応じて愛着度は高くなる。また前住地がどこにあるかによって愛着度は大きな異りを示し、前住地が市内にあるもの、市外、東京にあるものとは対照的である。これらのことは中田町、青葉台双方に

あてはまる。

また買物先との関連では、まとまった値のはる買物を横浜駅西口・伊勢佐木町などの市内商店街でするものの愛着度は、東京へ買物にでかける人と比べてきわだって高くなっている。しかし、日用品の買物先が市内であるかどうかということと横浜への愛着度とは関連性をみせていない。日用品の買物は住んでいる土地への愛着度とは別に、交通の便、買物の便利さが第一に優先するためであろう。

つぎに、家庭の主婦が横浜駅西口や伊勢佐木町へでかける頻度と横浜への愛着度を関連させてみると、「横浜に現在愛着をもっていない。将来ともてそうにない」と答えた人の割合は、横浜中心街へでる回数が少なく

表24—主婦の方は横浜駅西口へたびたびでかけますか

区分	中田町	青葉台
ほとんど毎日	34 < 11.3>	8 < 4.6>
月に1回	134 < 44.5>	60 < 34.5>
年1・2回	86 < 28.6>	48 < 27.6>
いかない	47 < 15.6>	58 < 33.3>
計	301 <100.0>	174 <100.0>

表25—主婦の方は伊勢佐木町・港方面へたびたびでかけますか

区分	中田町	青葉台
ほとんど毎日	14 < 4.8>	2 < 1.2>
月に1回	72 < 24.5>	21 < 12.2>
年1・2回	128 < 43.5>	66 < 38.4>
いかない	80 < 27.2>	83 < 48.2>
計	294 <100.0>	172 <100.0>

なることとともにふえている。ただし、横浜駅西口や伊勢佐木町へ行かないと答えた人とその人たちの横浜の愛着度とはかならずしも関係はみられないようである。こうしてみると、総体的に、市外から新しく転入してきた市民は、郊外部に住みつき、古い市民とつき合い、こどもが保育所、幼稚園、学校に入

り、新しい交際が生じたりしていくなかで徐々に横浜に愛着を感じていく過程がよみとれる。しかし、中田町と青葉台の二つの地域では、同じ郊外部にあつて多くの転入者、新しい市民をかかえながら、横浜市民として横浜へ対してもつ愛着度、横浜中心街との結びつきには大きな差がみられた。それは第1に

は、交通機関の不便さなど社会的、物理的な条件による制約が大きく、かりに横浜について関心をもとうとしてももてるような環境におかれていないことである。そこにははっきりとコミュニケーションの断絶がみられる。第2としては市民生活の構造の差といえる。すなわち中田町の人たちにとっては、横浜は昼間働き、買物をし、映画を楽しみ、夜は寝る場所としての意味をもっているが、青葉台の人たちにとっては昼間は東京で働き、家へ帰っても話題は東京のことで、横浜はただ夜寝るだけの場所ではない。だから同じ「横浜に愛着をもつ」とはいつでも、青葉台の人たちにとっては横浜は東京のベットタウンとしての役割がまっ先に立つことになる。中田町と青葉台の人たちのちがいは生活構造、すなわち東京への依存度のちがいといえよう。

<民生局児童課児童係長>

表—26〔A-4〕で4以下と答えた方におきぎします。横浜駅西口や伊勢佐木町・港方面へあまり出かけられないのはなぜでしょうか。

区分	中田町	青葉台
交通機関が不便	68 < 27.4>	78 < 44.8>
用事がない	93 < 37.6>	49 < 28.2>
よい店がない	7 < 2.8>	5 < 2.9>
娯楽機関が少ない	0	0
子供と一緒に遊ぶ場所がない	3 < 1.2>	1 < 0.6>
魅力がなく行く気がしない	9 < 3.6>	5 < 2.9>
その他	68 < 27.4>	36 < 20.6>
計	248 <100.0>	174 <100.0>

表27—ところであなたは最近横浜に移ってこられたわけですが、あなたは横浜市民として横浜に愛着をもっていますか。もしもっていないれば、将来愛着をもてそうですか

区分	中田町	青葉台
愛着をもっている	155 < 51.0>	64 < 36.4>
愛着をもっていない	14 < 4.6>	10 < 5.8>
いまもっていないが将来もてそう	62 < 20.3>	65 < 37.0>
将来とももてそうにない	19 < 6.2>	5 < 2.8>
わからない	55 < 17.9>	32 < 18.0>
計	305 <100.0>	176 <100.0>